

洛友会報



京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

洛友会々長
(大正元年卒)

鳥養利三郎

私は、今ではなるべく長い旅はしないことにしている。だのに、同学の後輩に頼まれたので、最近一週間たらず、鹿児島へ行つて来た。昭和二十六年の暮れ、公職を退いた後の数年間は、まだ元気もあつたし、義務や責任の軽い場合には、国内はもとより、時には海外にまで、気楽に出かけたものである。二十七年から二十九年までの間に、三・四回も鹿児島へ行つたことを記憶している。して見るに、今度のは十五年ぶりといふことになる。前々の場合には、汽車で二十余時間もかかったが、今度は大阪空港からYSで一時間五十分、ジェットならわずかに五十分だから、十五年の間に鹿児島も京都の大坂のお隣になつたわけで、たとえば、山形屋デパートで京菓子

が手にはいるくらいの変わり方をきたしているであろう。などと想像しながら出かけたのであるが、着いたとたんに、鹿児島人にとっては聖域であつたはずの、あの城山に、お城ではなくて、広壮大なホテルが巌然と構えているのを見て鹿児島でさえもやっぱりこうなるかと、おせつかいな気持ちになつたものである。

ところが、翌日、新納図書館長の「薩摩の教育」と題する講演を聞いて、感銘の余り、昨日のおせつかいの気持ちが一掃せられるに至つた。講演の一部をごくかいつまんで、ご紹介したい。

山本五十六元帥の戦死は、日本の暗号がつつ抜けにアメリカに解読されていたためであるといふことは、だれ知らぬものはあるま

い。暗号というものは、そう簡単に変えられるものではない。あのころ日本とドイツとの間には、機密な交信がたえず繰り返されていた。たまたまベルリン駐在者中に薩摩人がいたので、暗号でなく、薩摩ことばまるだしで打電したところ、これはアメリカでも解読できない。どこの国語だろう、と調べて見たが、わからずじまいに終わった、ということが戦犯裁判ではじめてわかつた、ということである。薩摩という所には、こういう特異性の強いローカル・カラーがあつて、それが今も持ちつづけられているという。

島津藩は他の諸侯のように城といふものを築かなかつた。それにいろいろ理由があるらしいが、とにかく「人を以て城となす」という信条から、藩政の眼目を「人材の育成」に置いていた。そして教育の方針としては、いわゆる郷中教育の表面だけを見ると、

薩摩教育は知育を軽視している、と誤解されるかも知れないが、薩英戦の結果、英國の科学と産業の進歩発達は大いに学ばなければならぬ、ときどりや否や、幕府の禁用した偉材が含まれていた。

また薩摩は、他のいずれの藩よりも早く、近代産業を導入していく。主たるものを見れば、薩摩は、他のいずれの藩よりも早く、近代産業を導入していく。主たるものを見れば、薩摩は、他のいずれの藩よりも早く、近代産業を導入していく。主たるものを見れば、

一八五二年(嘉永五年)大砲鑄造用反射炉構築

一八五六年 水車を動力とする紡績館の開設

一八六五年 蒸気鉄工機械所の建設

そのほか、造船、電信、ガラス等に至るまで検討せられたようである。

なお、一八六七年英國から購入の紡機の一つが、鹿児島カクイ綿会社の手に委(ゆだ)ねられ、以来無事故作動をつづけること百年、今は尚古集成館に陳列せられて、先人の功をしのばせている。



○久し振りに鳥養会長より御賛稿を頂きました。京都新聞(昭44・11・29)にのせられたものを転載したもので。(幹事 山本記)

上林一雄さんの思い出

京大名誉教授
〔大正6年卒〕

松田長三郎

山本幹事から、上林さんの思い出を書くようにとのことでありますので、故人を偲んで、重い筆を執ることとしました。

歳末に際して、種々の感懷が去来します。この一月には、大先輩石川芳次郎さんの急逝に会い、思い出を記しましたが、今まで、長年の異友上林さんの追憶を記すことは、誠に悲しくも又淋しい限りであります。此の秋はどういうものか、知友の訃音が相次ぎ、人生の無常を痛感する次第です。

私は大正3年9月（第一次世界戦争勃発の年）母校に入學し、同年7月、卒業ましたが、当時は、ほんとの大学は僅か数校の帝國大学だけ、学生は全部制服制帽で、これを大いに誇りとしたものでした。今頃のように、何百という大学が乱造され、制服は無く勝手気儘な服装で、どこのアンチャーンか無賴漢か、わからぬような服装をしたものは、一人もいなかつたし、できもしなかった。こういふ新入学生の中に、一人の背広姿

の紳士がありました。これが上林さんで、既に10年以上前に、理工科大学の物理学科を卒業の理学士でした。今一人、異色の人は、

小柳助治さんで、三菱電機に勤めておられたのが、再び学生生活に入られたのです。何れも10年以上がちがうのですが、お二人ともつとめて我々のペースに融和しよ

うとしておられました。我々も、この優れた先輩に対し、敬意を払い兄弟したが、先生方にとっても、こんな大物は、さぞかし、やりにくかったと思われます。

電気教室に入った左手の、今は研究室になつてある室が、本館講義室で、立派なシャンデリアや天井扇風機があるという、當時としては、如何にも大学の講義室らしい立派な室（と思つた）で、授業を受けたが、あの堅い木の腰掛け手であったから、墨を入れるとき手から手伝つた場合、とんちんかんなインキングを、やらかせて

上林さんは鋭い天才的な明晰な頭脳の持主であった。慰みに、数学をいじつてゐると退屈しないと云つていた。退屈凌ぎに数学をいじるとは余程の人である。いつも大きな夢を持っておられた。空中電気の応用、空氣分子の運動方向に指向性を与えての無限動力源、電波の本性に関する思索等、普通の観念を超越した考察・着想は傾聴に値した。

性格としては、竹を割つたような、サッパリした方で、一方他人の思惑を、兎や角考らず、直情徑行、いつも我が道を行つた。無邪氣、恬淡、童心の人、枯淡の人であり、逸話も多い。外の者であつたら通用しないが、上林さんだからこそ通用していたこともあり、人徳の故でもあらうが、一面、多少、皆もあきらめの点もあつた。

「上林君だから仕様がない」と云うことをもつて、時に私も忠告したこともあつた。ああいう人はそのものであつた。上林さんは、既に10年以上前に、理工科大学の物理学科を卒業の理学士でした。今一人、異色の人は、

小柳公平先生の電気磁気学で、何しろ年間を通じて、毎週4時間の講義で先生もお若かつたし、随分鍛えられたものです。いつ何どき質問の矢が飛んで来るか判らぬ。後ろの方へ逃避する者があると、急にそこへ飛び火する。答えられないと「次ぎッ！ 次ぎッ！」と廻つて行く。みんなは戦々兢々、上林さんは、泰然自若たるものでした。実験実習の助手の方には、関野先生始め鍊達の方々がおられたが、上林さんは、時々こういう人達を手古摺らせたこともあつた。

あの当時、電気の一回生は、機械科の学生と、殆ど同様な科目を受講していた。数学・力学・材料強弱学・機械設計法・水力学・蒸気機関タービン等。機械設計の製図を、一枚、まけてもらつた張本人は上林さんだった。製図は不得

たりの製造から始め、各種の光源・バリウム塗化物・真空計等、新生研究所の所員として、青柳先生指導の下に全田積（化学）阿部清、山崎惣三郎等の諸氏とともに、研究に没頭されたが、タンゲステン織維の製造から始め、各種の光源・バリウム塗化物・真空計等、新生研究所の所員として、青柳先生指導の下に全田積（化学）阿部清、山崎惣三郎等の諸氏とともに、研究に没頭されたが、タンゲステン織

面を開拓せられた。

終世、学問を楽しんだ人であつたが、後年、独自の研究を継めて学位を得られたが、これは初め加藤教授が同教授逝去の後は、林重憲教授が、一方ならず配慮されたことも思い出の種である。

勤務時間が終わると、電気評論編集部の大塚徳雄君及びその一族郎党（そういう慣わしていた）教室からは、加藤さんや私など、テニス・コートに集まり、球の見えなくなるまで、ヘトヘトになるまで、テニスを楽しんだ。時には助手の皆さんを交えて、お互いの家に集まつて、ダウト会と云つて

「これ何ですか」と問う。先生は一寸考えられたが、「これは、まだやつていない」と答えられた。すかさず「先生！」それ、イモナイトとちがいますか」と云つた。

先生は、きまりが悪い。皆はドック笑する。上林さんは、こんな茶目っ氣も、稚氣も多分にありますか」と云つた。

（略）

トランプやダウトを遊んだが、こんな単純な無邪気な遊戯に、大の男が夢中になって打ち興じたこと、も懐かしく思い出される。土曜日の帰りには、よく上林さんを誘って、新京極の天活俱楽部へ行き、カキ餅をかじりながら、活動写真力量互いに伯仲し、早い勝負ではあるが、お互いに勝を譲らず、徹夜で鳥驚を戦わせた。随分、奥様には迷惑をかけていたことと思う。奥様と云えば賢夫人の誉れ高人であった。何事にも無頓着、世故にはクヨクヨ屈託することなく、自由に行動した上林さんの、尻拭いや万端のお話は、奥さんの暖かい行き届いた心遣いによつて補われ、償われていたことが多く内助の功は大したものであったと思う。歌の道にも明るく、殊に皆、頭の良い子福者で、わが電気教室でも、上林さん、明君、お孫さんと三代揃つて卒業されたことは異数のことである。

私のクラス（大正6年及7年卒業者）は卒業以来、信友会と云う同級生会をつくっているが、卒業当時は、大抵毎月、宇治の「花屋敷」で、クラス会（会費はたしか三円位）をやつたが、その交渉は、上林さんがやつて下さった。

こんな時はいつも総世話役は、山村忠行君が引き受けて下さった。現在でも、毎週一回、大阪天満橋の松坂屋で会合し余生を楽しんで観た。説けばメタッタにいやとは言わぬなかつた。私は暮はやらなかつたが、同級の北村末造君とは力量互いに伯仲し、早い勝負ではあるが、お互いに勝を譲らず、徹夜で鳥驚を戦わせた。随分、奥様には迷惑をかけていたことと思う。奥様と云えば賢夫人の誉れ高人であった。何事にも無頓着、世故にはクヨクヨ屈託することなく、自由に行動した上林さんの、尻拭いや万端のお話は、奥さんの暖かい行き届いた心遣いによつて補われ、償われていたことが多く内助の功は大したものであったと思う。歌の道にも明るく、殊に皆、頭の良い子福者で、わが電気教室でも、上林さん、明君、お孫さんと三代揃つて卒業されたことは異数のことである。

私のクラス（大正6年及7年卒業者）は卒業以来、信友会と云う同級生会としては大正十四年前後の卒業生の方々によつてつくられている十四日会が、毎月十四日に、大阪の中央電気俱楽部で集会を持たれ、現在既に二百回十回を数えられる盛況である。現在伊藤俊夫関西電力専務が、幹事としてお世話下さっている。

上林君は、宇治の由緒ある名家である。お宅には橋姫神社が鎮座されてあるが、これはもと、宇治橋のあの有名な出張りの所に、鎮座しておられたのを、邸内に遷されたと云う。その神職でもあ

るトランプやダウトを遊んだが、この單純な無邪気な遊戯に、大の男が夢中になつて打ち興じたこと、も懐かしく思い出される。土曜日の帰りには、よく上林さんを誘つて、新京極の天活俱楽部へ行き、カキ餅をかじりながら、活動写真力量互いに伯仲し、早い勝負ではあるが、お互いに勝を譲らず、徹夜で鳥驚を戦わせた。随分、奥様には迷惑をかけていたことと思う。奥様と云えば賢夫人の誉れ高人であった。何事にも無頓着、世故にはクヨクヨ屈託することなく、自由に行動した上林さんの、尻拭いや万端のお話は、奥さんの暖かい行き届いた心遣いによつて補われ、償われていたことが多く内助の功は大したものであったと思う。歌の道にも明るく、殊に皆、頭の良い子福者で、わが電気教室でも、上林さん、明君、お孫さんと三代揃つて卒業されたことは異数のことである。

こんな時はいつも総世話役は、山村忠行君が引き受けて下さった。現在でも、毎週一回、大阪天満橋の松坂屋で会合し余生を楽しんで観た。説けばメタッタにいやとは言わぬなかつた。私は暮はやらなかつたが、同級の北村末造君とは力量互いに伯仲し、早い勝負ではあるが、お互いに勝を譲らず、徹夜で鳥驚を戦わせた。随分、奥様には迷惑をかけていたことと思う。奥様と云えば賢夫人の誉れ高人であった。何事にも無頓着、世故にはクヨクヨ屈託することなく、自由に行動した上林さんの、尻拭いや万端のお話は、奥さんの暖かい行き届いた心遣いによつて補われ、償われていたことが多く内助の功は大したものであったと思う。歌の道にも明るく、殊に皆、頭の良い子福者で、わが電気教室でも、上林さん、明君、お孫さんと三代揃つて卒業されたことは異数のことである。

定期的に月刊せられるのは、一つに保寿康象君の献身的なお骨折によるもので、こんなことは、なかなか出来ることではない。山村君といい、保寿君といい、我々のクラスは、クラスのことにサービスして下さる篤志家に恵まれていることは、大変幸福なこと感謝している。

なお、同級生の会としては大正十四年前後の卒業生の方々によつてつくられている十四日会が、毎月十四日に、大阪の中央電気俱楽部で集会を持たれ、現在既に二百回十回を数えられる盛況である。現在伊藤俊夫関西電力専務が、幹事としてお世話下さっている。

或時、上林さんは、京都電業会で講演を頼まれ、晚餐になつたとき、正座に据えられた。来賓の難波先生より上座に坐られたので先生は大変機嫌が悪かつたと洩らしておられた。理学士であつてもまだ学生である。先生は既に勲一等大学の教授として赴任され、帰らでからは立命館大学、大阪電気通信大学等に教鞭を執られた。信友会には殆んど皆出席であった。昨夏、鳥羽・伊勢へ二泊三日の旅行をした際、真珠島で、あわび採取の実演中、突然、上林さんが行方不明になり、一行の者が、血眼になつて、島の廻りを幾回となく捜し廻り、便所の中まで限なく捜したが皆目判らず、夕暮は迫るしかではない。

嘉十郎、吉田卯三郎等の諸教授、上林さん、それに私も席末に加えて頂いて、十人位、祇園の中村桜や平野家などで、御馳走をして下さつたが（今時は却々そんなことはむずかしい）そんな席上、皆、大先生の前で、大抵かしこまつておられた。こういう雑誌が、う同人誌を月刊して隨筆を載せているが、上林さんは、奥さんとの初恋物語を、綿々たる情緒で記載しておられた。こういう雑誌が、定期的に月刊せられるのは、一つに保寿康象君の献身的なお骨折によるもので、こんなことは、なかなか出来ることではない。山村君といい、保寿君といい、我々のクラスは、クラスのことにサービスして下さる篤志家に恵まれていることは、大変幸福なこと感謝している。

なお、同級生の会としては大正十四年前後の卒業生の方々によつてつくられている十四日会が、毎月十四日に、大阪の中央電気俱楽部で集会を持たれ、現在既に二百回十回を数えられる盛況である。現在伊藤俊夫関西電力専務が、幹事としてお世話下さっている。

或時、上林さんは、京都電業会で講演を頼まれ、晚餐になつたとき、正座に据えられた。来賓の難波先生より上座に坐られたので先生は大変機嫌が悪かつたと洩らしておられた。理学士であつてもまだ学生である。先生は既に勲一等大学の教授として赴任され、帰らでからは立命館大学、大阪電気通信大学等に教鞭を執られた。信友会には殆んど皆出席であった。昨夏、鳥羽・伊勢へ二泊三日の旅行をした際、真珠島で、あわび採取の実演中、突然、上林さんが行方不明になり、一行の者が、血眼になつて、島の廻りを幾回となく捜し廻り、便所の中まで限なく捜したが皆目判らず、夕暮は迫るしかではない。

福をお祈りします。
(合掌)
(記)

嘉十郎、吉田卯三郎等の諸教授、上林さん、それに私も席末に加えて頂いて、十人位、祇園の中村桜や平野家などで、御馳走をして下さつたが（今時は却々そんなことはむずかしい）そんな席上、皆、大先生の前で、大抵かしこまつておられた。こういう雑誌が、う同人誌を月刊して隨筆を載せているが、上林さんは、奥さんとの初恋物語を、綿々たる情緒で記載しておられた。こういう雑誌が、定期的に月刊せられるのは、一つに保寿康象君の献身的なお骨折によるもので、こんなことは、なかなか出来ることではない。山村君といい、保寿君といい、我々のクラスは、クラスのことにサービスして下さる篤志家に恵まれていることは、大変幸福なこと感謝している。

おられるが、上林さんの獨得の談話は頗る興味があった。水野先生指導の下に、伊勢湾で、無線電信の実験をやられたのも、この方面での草分けの時代でもあった。随分古いことだが、ある初夏、御一家から、阿部さんなどと螢狩りに招かれて、壯觀な螢合戦を宇宙川上流で見せて貰い、一同でいろいろの歌を唱和したが、阿部さんの「おんな心」の朗々たる歌声は未だに耳底にあるが、古き良き時代であった。

青柳研究所退職後は、旅順工科大学の教授として赴任され、帰らでからは立命館大学、大阪電気通信大学等に教鞭を執られた。信友会には殆んど皆出席であった。昨夏、鳥羽・伊勢へ二泊三日の旅行をした際、真珠島で、あわび採取の実演中、突然、上林さんが行方不明になり、一行の者が、血眼になつて、島の廻りを幾回となく捜し廻り、便所の中まで限なく捜したが皆目判らず、夕暮は迫るしかではない。

この畏友を偲び、謹んで御冥福をお祈りします。

（合掌）

物理教室の水野敏之丞先生は、毎年、木村正路、石野又吉、玉城

鍛え直さないとダメ

社会を無視の暴力学生

A 今日の話題は、暴力学生の問題についてどうですか。たしかに、このごろの暴力学生は学生じゃなくて暴徒だね。彼等の考え方は我々と断絶しているといふか、全く理解できないね。

こういう学生は、どこかにまとめて強制労働か、何かさせて、根本から鍛え直さないとダメだと思うね。これから日本の新しい力となるべき青年が、法治国家として認められないような暴力に走るということは、絶対に容認できないし、これを放認したら大変なことだね。

B 結論からいうと、小笠原にでも連れて行って、二ワトリに食わすような米を与えて勝手にさせ、坐禅を組むように強制したらどうだろ。

A そうだね。強制的に島にでももつていて、鍛え直さないと役に立たないと思う。日本の将来のために、有力な戦力となつてもらわねばならないのだからそこは気長に反省してもらわなければいけないと思う。

B 大学紛争をみていると、どの場合でも全く学生の行動に少し

もユーモアがないし、昔、我々少々乱暴はしたけれど、まだ愛敬があったよ。

C 大学の中でも、東京大学、京都大学とか高校についてみてどちらかというと、全国的にみて、トップクラスの学校において、紛争が生じ、そんな方向に多くの学生が走っているという感じだ。

D 流行はあるのだろうが、騒がねば、トップクラスでないようない感じだ。

E 彼等学生は、何か自分なりに学生を対象にして、先生方が日夜、苦心されているというのは感だろうと思う。それがそれな

りもユーモアがないし、昔、我々の学生時代とは性質が違うようだ。

F やはり、学生ということで甘く見失ってしまうような気がしますよ。

G コントロールのきかない機械みたいなものだね。

H やはり、学生ということでお伝えします。

最近の大學生公見潮

について思う

(昭和八年卒)

潮見公安

全国的に大学紛争の波がどよめきつたある昨今、たまたま職場を同じくする洛友会中国支部会員の数名(潮見・井上・松谷・大月・門野内・村

尾)が集まって暴力学生の行動に対する批判、放談しましたので、ここに近況報告の一端としてお伝えします。

A 何かにつけ、上手の信頼感もあつたし、自尊心もあつたし、他人を尊敬するという意識もあつたのが、今は憎しみだけだ。

B 実際、自分のことだけしか考えていないんだね。社会のことでも、何も無視している。こんな学生を対象にして、先生方が日夜、苦心されているというのは感だろうと思う。それがそれな

C 大学の中でも、東京大学、京都大学とか高校についてみてどちらかというと、全国的にみて、トップクラスの学校において、紛争が生じ、そんな方向に多くの学生が走っているという感じだ。

D 大部分のものは、甘い考えでいてゆくのだが、上方の方に妥協のないのが、ほんの少数いるんですね。

E 彼等学生は、何か自分なりに旧制高校のあった時代の大学と同じことを今の大学でやっていたということが、間違っているのでは、ないでしょうか。

F 大学も、大いに改革しなければならない点もあると思うね。

きるね。

りで、エスカレートして、だんだん変な方向に走っていくのでしょうか。

考え方は対決以外はない。今まで話し合いで、いかにして大学を良くするかとすることを、お互いに話し合いで行なうと思つたが絶対に平行線で、物別れだということが、はつきりした。

そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

そこにあるようだ。

G 大学の自治ということで甘えがあつて、何をしても学内なら自由奔放にできるという考えがある。そこにあるよ。

H 意志があるかと云ふべきである。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

I その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

J そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

K その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

L そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

M その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

N そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

O その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

P そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

Q その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

R そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

S その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

T そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

U その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

V そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

W その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

X そこで機動隊導入で封鎖解除し

ようやく軌道に乗ったわけだ。

Y その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

Z その後、京大、その他の大学も機動隊を入れて正常に復しつつある。結局、話し合いで行なうことは、正常化できないのですね。

B

旧制高校時代の友人、先生に対する信頼感とか、そういったものが養成されてから、大学に行く場合と、何もなしで大学に行く場合とでは、大分違うのではないかでしようか。

C

さつき、おっしゃった一割の先鋭分子についていくといふこと

とです、昔でも共産主義など一部にはあつたわけですが、全体に常識的にいって、

行動する場合、広い意味での規範というものが、あつたものです。

そういうものがいても我々はこういう立場なのだ、というはつきりした考え方をもつてゐた。それが今では、一部の者がいえは、さつとついていくような風潮がある。

A
○×式の教育をうけた

それはね、終戦後、で、詳しく考えずに、ただ○×の教育が一番いけなかつたと思います。

自分自身の基礎的な判断なしに右か左か決めてしまう。ただついていくだけです。育つた人間がそれですね。テレビを見ていると、たとえば朝やっているスタジオ一〇二です

ね。あれは非常に安直に結論を出している。いろいろ話しさせて、時間的制約があるからでしょ、その中で司会者側から適当に結論を出す。物事を深く考え、つきつめるということな

に、結論を出すことに慣らされてるので、思考が非常に浅いといふことです。民主主義の原則を身につけさせねばだめだね。

A
侵されず、侵すというのが、

今の時代ですね。

D
今のは、高校から大学に入ると

は大学受験のための教育みたいなものです。

A
侵されず、侵すのが、

今の時代ですね。

E
昔は学校で、道徳・修身とい

つた教育があり、家庭では、家

庭教育の基盤があつたのですが今はどうです。家庭での子ども

の教育の規範がないように思われますね。戦時中には、軍国主

義的教育があり、家庭では、家

庭を大切にするとか、君に忠とか

あつたのですが、戦後そいつ

たよりどころが失われてしまつたというのが原因ですね。

A
それは、たしかにあります。

今的小さい子どもは、割りに厳しく教育されているようですが終戦後頃に生まれた子どもは全く野放しの状態にあつたのではないか。今の大學生位が、そ

の問題の時代だ。家庭のしつけとともに、今の中学校の先生方に

民主主義といふものは、必ず個人主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。

F
それは、たしかにそうですね

民主主義をとおつて、それから民

主主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。自分を尊重するということは、

他人を尊重するということの筈

です。その原則は侵さず、侵されずということですかね。この過程を通らず、いきなり民主主義国家となつたので、そのへんに問題があるのでですね。

C
我々の高校時代は、文学・哲

學書など自由に、いろんなもの

を読み語ることによって、自分

といふものを形成し、自分を客

観的に見ようとする時代でした

D
今は、高校から大学に入ると

急に、野放しとなつて、これで

何もかも終わつたような気分に

なる。高校時代は、小説もまと

ね。あれは非常に安直に結論を出している。いろいろ話しさせて、時間的制約があるからでしょ、その中で司会者側から適当に結論を出す。物事を深く考え、つきつめるということなに、結論を出すことに慣らされてるので、思考が非常に浅いといふことです。民主主義の原則を身につけさせねばだめだね。

A
侵されず、侵すのが、

今の時代ですね。

E
昔は学校で、道徳・修身とい

つた教育があり、家庭では、家

庭教育の基盤があつたのですが今はどうです。家庭での子ども

の教育の規範がないように思われますね。戦時中には、軍国主

義的教育があり、家庭では、家

庭を大切にするとか、君に忠とか

あつたのですが、戦後そいつ

たよりどころが失われてしまつたのが原因ですね。

A
それは、たしかにあります。

今的小さい子どもは、割りに厳しく教育されているようですが終戦後頃に生まれた子どもは全く野放しの状態にあつたのではないか。今の大學生位が、そ

の問題の時代だ。家庭のしつけとともに、今の中学校の先生方に

民主主義といふものは、必ず個人主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。

F
それは、たしかにそうですね

民主主義をとおつて、それから民

主主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。自分を尊重するということは、

想は自由だとはいえ、暴力学生を支援する大学の先生もあるがこれは非常に困ったものだ。

これは非常に困ったものだ。

これは非常に困ったものだ。

C
我々の高校時代は、文学・哲

學書など自由に、いろんなもの

を読み語ることによって、自分

といふものを形成し、自分を客

観的に見ようとする時代でした

D
今は、高校から大学に入ると

急に、野放しとなつて、これで

何もかも終わつたような気分に

なる。高校時代は、小説もまと

ね。あれは非常に安直に結論を出している。いろいろ話しさせて、時間的制約があるからでしょ、その中で司会者側から適当に結論を出す。物事を深く

考え、つきつめるということなに、結論を出すことに慣らさ

れてるので、思考が非常に浅いといふことです。民主主義の原則を身につけさせねばだめだね。

A
侵されず、侵すのが、

今の時代ですね。

E
昔は学校で、道徳・修身とい

つた教育があり、家庭では、家

庭教育の基盤があつたのですが今はどうです。家庭での子ども

の教育の規範がないように思われますね。戦時中には、軍国主

義的教育があり、家庭では、家

庭を大切にするとか、君に忠とか

あつたのですが、戦後そいつ

たよりどころが失われてしまつたのが原因ですね。

A
それは、たしかにあります。

今的小さい子どもは、割りに厳しく教育されているようですが終戦後頃に生まれた子どもは全く野放しの状態にあつたのではないか。今の大學生位が、そ

の問題の時代だ。家庭のしつけとともに、今の中学校の先生方に

民主主義といふものは、必ず個人主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。

F
それは、たしかにそうですね

民主主義をとおつて、それから民

主主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。自分を尊重するということは、

もに読む時間もないくらいですからね。

A
人間形成にとって一番大事な時期である高校時代が、余りに予備校的になりすぎ、教育のあり方が、本末転倒しています。

大学も改革して、封建制を打破しなければならないし、反省すべきところは、反省して直してもらわないと、日本が将来、世界の一員として発展するためには教育が基本ですから。

大学も改革して、封建制を打破しなければならないし、反省すべきところは、反省して直してもらわないと、日本が将来、世界の一員として発展するためには教育が基本ですから。

C
我々の高校時代は、文学・哲

學書など自由に、いろんなもの

を読み語ることによって、自分

といふものを形成し、自分を客

観的に見ようとする時代でした

D
今は、高校から大学に入ると

急に、野放しとなつて、これで

何もかも終わつたような気分に

なる。高校時代は、小説もまと

ね。あれは非常に安直に結論を出している。いろいろ話しさせて、時間的制約があるからでしょ、その中で司会者側から適当に結論を出す。物事を深く

考え、つきつめるということなに、結論を出すことに慣らさ

れてるので、思考が非常に浅いといふことです。民主主義の原則を身につけさせねばだめだね。

A
侵されず、侵すのが、

今の時代ですね。

E
昔は学校で、道徳・修身とい

つた教育があり、家庭では、家

庭教育の基盤があつたのですが今はどうです。家庭での子ども

の教育の規範がないように思われますね。戦時中には、軍国主

義的教育があり、家庭では、家

庭を大切にするとか、君に忠とか

あつたのですが、戦後そいつ

たよりどころが失われてしまつたのが原因ですね。

A
それは、たしかにあります。

今的小さい子どもは、割りに厳しく教育されているようですが終戦後頃に生まれた子どもは全く野放しの状態にあつたのではないか。今の大學生位が、そ

の問題の時代だ。家庭のしつけとともに、今の中学校の先生方に

民主主義といふものは、必ず個人主義になればいいのですが、個人主義とは自分を尊重する。

F
それは、たしかにそうですね

民主主義をとおつて、それから民

アメリカ雑感

阿部 要

(昭和八年卒)

一昨年(一九六八年)の秋から初冬にかけて原子力関係の会議と視察のため、アメリカに出かけた

私は、丁度十一月下旬の第三木曜日、即ちサンクスギブニングデーの祭日でしたが、当市では毎年盛大な学生のパレードが催されました。大部分は大学生ですが、高等

学校や小学校の生徒の隊も混つていました。また近くの大学のみな

らズ、相当遠方から来た学生の隊も参加していました。それぞれの

隊の先頭には必ず大きな米国旗と校旗を持った学生がいて、次にミニスカートの女子学生が赤い制服で、バトンガールの行進をし、つづいて、男子学生のブラスバン

ド隊が、かなりあざやかな服装をして隊伍堂々と行進してまいりました。これらの隊が二時間以上も

引き行進していましたので、参加学生隊の数はおびただしいもの

と思いました。なお、黒人学生隊の中には米国旗を持っていない

のも見受けられました。

またこの日に家庭ではカボチャのパイと七面鳥等を食して、勤労に対する感謝の意を表わすこととなっていますが、この理由は、英國より米国に渡って来た初めての冬は、食料難のため多くの餓死者を出したそうですが、カボチャと野生の七面鳥をとつて越冬した者のみが、生きながらえた故事を思い出したことだそうです。

組合は結束して、他の州から出張してくる溶接員をボイコットし、もし無理に、これを強行する場合は、同情して他の職種の組合員も全部その工事に関しては、労働を拒否する行為に出で、自分達の生計権の安全を守ろうとする強い動きのあることは、日本と甚しく異る感じがいたしました。

フライデルフィヤ市は、英国人が渡米して来てつくった初期から

何百年も経た今日でも、なお保存されているのを見て、いかに職人組合意識の結束が固くて根強いものがあるかを感じさせられました。

内諾したのが半ヵ月程早過ぎたことになりましたので、久野さんに事情の変化を申し出たのですが、決定済みとのことで取り上げられず、また私も内諾した以上は余り強くもいえず、副支部長と幹事の人選に協力をお願いすることとなり、久野さん、中島達三(昭二二)さんのご協力によつて、副支部長に西本憲三(昭六)さん、幹事に山田昭二郎(昭二五)さんと沢田新一郎(昭二五)さんのご承諾を得て、五月の支部総会で役員交替をいたしました。そして今後は副支部長が翌年は支部長になり、副支部長

しをすることが必要であり、そのためにはまず事業資金ということで、名簿の広告集めには役員の方々の協力を得て、八五件百万円余の申し込みを獲得出来ました。約一三〇パーセントの達成率でお骨折り下さいました会員の方々、関係会社の方々に厚くお礼申し上げます。従つて春・秋の旅行会、または趣味の集まり、講演会、グループの集まりなどは更に活発に出来るだらうと存じますので、支部の方々で計画がありましたならばお申し出下さい。避けられないことですが、会員の亡報を聞き弔辞と香奠をお送りするのは心よいものではありませんので、健康にはご留意下さい。せめて私の支部長在任中は。

東京支部の近況

支昭和五年卒長青木三郎

淡路島・鳴門を見学

(昭和三十年卒) 関西支部 福川幸勇

れて進んでいたうちには、非常に荒れはてた町の一角が目に入りまして。これは全く黒人街となつたためだそうですが、白人は市の中心部を黒人にうばわれて、郊外に移っているとのことでした。まことに寒む寒むとした感じがいたしました。

原子力関係の建設現場を見学しているうちに、工事工程が予定より一年乃至二年余も延びているのを少からず見受けました。色々理由もききましたが、共通して言えることは、溶接工組合のストライキによるもので、しかもその理由は単に賃金要求でなく、州ごとの

山本幹事より洛友会報に支部の近況について書けとのご指示を受けました。支部長を引き受ける緯について申し上げます。小生の前任者は名支部長であった久野清（昭四）さんで、長く奉仕されたので、是非統いて留住を期待していましたが、会社を変わり助手が自由に使えなくなつたとのことで、小生を尋ねて来社されて、支部長のバトンタッチをいわれました。今まで支部会員でありながら、所謂その他大勢の一員として、稀れにしか総会にも出席しないなかつた私が、支部長を務めるのは不適当であり、從来から洛友

会に熱心であつた数人の名を思い出して、もつと適当な方があることを主張いたしました。久野さんは仕事のことでも、個人的にも、色々とお世話になつており、現在の久野さんの立場も判りますので、数回来社されて口説かれまして、副支部長と総務および会計幹事に適任者が得られるならばといふことで、内諾いたしましたのが四十四年一月下旬でした。私の勤めている会社の定時株式総会が、二月下旬に行なわれ社長が病気を理由に辞任して、私が社長に就任することに決まりましたのが二月上旬の取締会でした。久野さんに

淡路島・鳴門を
関西支部（昭和三十年卒）

得るという盛会でした。

当日は、夜来の雨が嘘のように
からりと晴れわたる小春日和で、
家族ともども、秋の淡路をなごや
かに楽しみました。

京都・大阪おののおの三台のバス
を仕立て須磨・長田の港よりフェ
リーボートで、淡路島へ、洲本の
旅館海月で合流して昼食。支部長

の挨拶と大谷泰之教授の教室現況や洛友会幹事山本茂雄氏より本部の近況報告をお伺いしたあと、鳴門岬へと向かいました。

途中、福良の町で、二万ボルト配電線の傍を通りましたが、われわれの町の中にある配電線とあまり違わず、説明がなければ見過ごすところ。

鳴門岬に着くと、折よく潮流が激しい時で、渦巻く鳴門海峡と瀬戸内海の守護神として仁王門のように雄々しく立つ鉄塔が、みごとな調和を示しています。

これはアドバルーンを使うという奇抜なアイディアで、架線され

たもので、わが国では、最長の海峡横断送電線とか。技術の高さを誇示するような鉄塔の高さが印象的。

完全に舗装された快適な国道二十八号線に、夢の架け橋、国際空港など発展する淡路の息吹きを感じつつ、車中では旧交を温め、和氣あいあい、実になごやかで、有意義な一日を、全員再会を約して散会した。

なお、洛友会関西支部においては、例年のゴルフ会のほかに、二月・三月にそれぞれ将棋・麻雀の会を計画していますので、まだ申し込みをされていない方は、事務



加藤関西支部長のあいさつ



約300名の昼食（於旅館海月）

局へのご連絡をお待ちしております。

な
る
と

小学二年 池田けい子

鳴門見学会のことを会員池田栄一氏（昭和26年卒のご長女池田けい子さん／小学校2年）が、学校の作文に書かれ、なかなか面白いの意味で掲載させて頂きました。

今日は、お父さんの大学のどう

そう会「らくゆう会」です。あさ

早くおきて、七時半にでかけました。大きなかのバスの、のりばについて、名ふだをもってバスに

り、前から二ばん目にすわりました。バスにのったのは、八時十五分。バスは八時半にでるのが、八時四十五分におくれました。バスガイドさんが「これからあかしの海までとまりませんから、お手あらいに行ってください」と、いいました。

みんなそろっていよいよはっしゃ、なるとへむかつて出ばつです。ガイドさんのいろいろなせつめいがあり、それがおわると、しかしの人がちずをくばつてせつめいしました。私はつまらないので、け色を見ていきました。やつとあかしの海につきました。

十時四十分にふねへのつたら、ガイドさんが「バスからおりてください」といつたので、お父さんとおりて、ふねの中でテレビを見ました。それから海を見ていくうちに、島が見えてきたのでバスになりました。

バスが走り出したらマラソンしているのがよく見えました。だいぶのつているうちに、よいしました。しかしの人が「だいじょうぶですか。」としんせつにきいてくれたので、私はうれしく思いました。

ホテルについたらかんさいでんりょくのふくしゃちょうさんから、お話をきいて、ごはんをたべました。海べでざざえのふたを見つけました。

またバスにのつたらこんどはつかれてねてしまいました。しならいうちに、なるとのうずのところへ来ていました。うずはあまり見えません。下のほうまで行きましてがうずはよく見えませんでした。ほらあなたがいました。小さなかわいらしき子が「お父さんあれなに。」ときいていました。

でんきをおくるそうでんせんのとうも見えました。ずいぶん高いのでびっくりしました。

それからバスにのつてかえるとき、パンとジュースをもらいました。海についたとき、しばらく時間があつたので、さかなつりをしている人を見ていました。

それからふねにのつて、テレビを見ました。まどのほうを見るとゆうらんせんが見えました。ゆうらんせんはわたしのふねをどおりこして、行つてしましました。

そしてあかにちかくなつたのでバスにのりました。かんさいでんりょくのふくしゃちょうさんがふねからおりた時わかれました。それから私はねてしまつて目がさめたなら大きかったです。

本とうにたのしい一日でした。私の思い出、私より小さな子どももいたし、おじいさんもいたし、先生もいたし、わかい人もいました。みんなたのしそうでした。

北陸支部だより

(昭和28年卒) 堀 英二

真夏の8月6日、富山市内の料亭海老亭において、昭和44年度洛友会北陸支部の懇親会が開催された。

前回の北陸支部総会は昭和42年に鳥養先生・林重憲先生をお迎えして開催されているから、約2年ぶりに開かれたことになる。

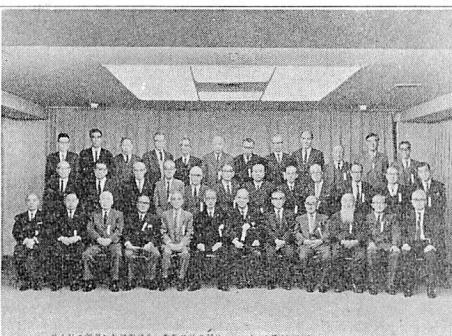
今回の懇親会は、北陸支部会員の2年ぶりの顔合わせということと、長井要蔵会員の送別会とを兼ねて催された。大先輩である長井要蔵さんは、都合により8月中旬に長年住みなれた富山市を去つて兵庫県宝塚市の方に移られるので、洛友会の方も急拠予定を変更して、ご出発までに開催することになった。そのため連絡その他の時間的な余裕がやや不足した。

出席者は別記のようであるが、今回は特に神奈川県の逗子市にお住まいの野際幸雄さんが参加された。一方富山市にお住まいの増田盛雄さんがご病気のため欠席されたのは残念であった。

懇親会は、荒井北陸支部長の挨拶で始まった。2年ぶりの顔合わせがあるので、会員一同大いに話がはずんだ。特に今月で当地を去られる長井さん、遠路はるばる参加された野際さんの周辺は、ひときわ暖やかであった。

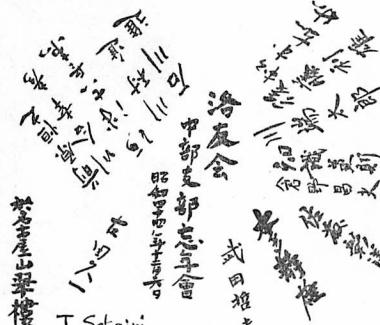
北陸支部会員一同としては、長井さんを関西へお送りするのは、まことに残念ではあるが、きびしい北陸の気候と異なり温暖な宝塚市へお移りになるのであるから、やむを得ないと思われる。

長井さんは、この後8月20日に富山を出発されて、房江夫人とともに兵庫県宝塚市へ転居されたのであるが、11月3日、長年電気事業のため尽力された功績をもって



中部支部 忘年会

(昭和6年卒) 古田 久一



大正九年電講卒業の愛知産業社長井上弥三郎君が44年度叙勳で、

井上弥三郎君
叙勳祝賀会

(大正五年) 立石 亨三

講昭4 百済 健41
以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

○洛友会大長老上林一雄氏が昨年秋(一〇・二七)急逝されました。上林さんは、関西支部の旅行会に出席のご返事を頂いておりましたが、その前に風邪をひかれ、二、三日のうちに、ご逝去になられ、誠に痛恨に堪えません。京大名譽教授松田長三郎先生に、その思いを書いて頂きました。

○各支部より近況、或は随想をお出しを書いて頂きました。

稿を頂き厚くお礼申上げます。

幹事 山本茂雄

勲五等の叙勳が決定し、11月13日東京にて勲五等双光旭日章を受章されたのである。

宴が進むにつれて、斎藤敏信さんの十八番である手品や、荒井武治さんの小唄(端唄?)が披露された。久しぶりの懇親会であり、会員一同、つまる話はつきせぬ風情であったが、8時すぎ散会した

長井 要蔵 出席者 荒井 武治
金井久兵衛 野際 幸雄
萩原 博 斎藤 敏信
早東 嘉夫 松本 肇
森本 芳夫 西村 尚和
松崎 司郎 野村 精二
杉本 宏新 堀 英二
籠 宗和

勲四等を受けられたので、講習所同窓会有志が11月30日、京都タワーホテルで祝賀会を催した。

岡本・山本両先生の臨席を得、43名の出席で盛況であった。

計音

大 6	太田二郎	44 · 10 · 27
大 7	岡添柳吉	44 · 12 · 31
大 12	上尾益次郎	44 · 12 · 31
大 12	丹波孝三	45 · 1 · 5
大 7	金子三明	44
講大 8	島田三郎	
講大 9	杉林忠一	
講昭4	百済 健41	

上林一雄
岡添柳吉
上尾益次郎
丹波孝三
金子三明
島田三郎
杉林忠一
百済 健41